東京藝術大学 COI拠点

障がいと表現「音と光の動物園」

HYOU

Arts & Science LAB. COI news

Vol.7

発行：2016年12月20日
編集：荒井経、平諭一郎、田中眞奈子、保坂理和子、劔持由起夫、荒殿優花
制作：平諭一郎、塚田史子
発行者：東京藝術大学COI拠点
東京都台東区上野公園12-8 東京藝術大学 Arts & Science LAB.
Tel:050-5525-2464　Fax03-3555-8709
Mail:coi-info@ml.geidai.ac.jp　Web:http://innovation.geidai.ac.jp
紙：ヴァンヌーボ T-FS

hYoU rE Vol.7
Arts & Science LAB. COI news

目でさわる浮世絵 in LUMINE 0

文化共有

展示風景「GEIDAI ARTS LUMINE 0」

東京藝術大学と株式会社ルミネは、JR新宿駅新南エリアにオープンした商業施設「NEWoMan」内の文化交流施設「LUMINE 0」において「GEIDAI ARTS LUMINE 0」(2016年7月28日(木)～ 8月14日(日))を開催し、新しい文化の姿を発信していく試みとして多ジャンルなイベントを実施した。その中で開催された展覧会「ハイカラ～目でさわる浮世絵～」では、本COI拠点の協力によりボストン美術館スポルディング・コレクション浮世絵を忠実に再現し、さらに作品に香り付けを施した「香る・さわれる浮世絵」を陳列した。来場者が浮世絵を間近で見ると、神秘的で艶めいた伽羅の香りや、ほんのりとした甘さの梅の香りなどを楽しむことができ、通常の美術展よりも来場者の滞留時間が長い、画期的な試みとなった。また、7月30日(土)には、浮世絵解説のスペシャリストである牧野健太郎氏(NHKプロモーション)によるレクチャーが開催され、浮世絵の高精細画像を大画面で見ながら、細部に宿る美や隠された暗号と謎解きの解説に多くの来場者が酔いしれた。今後も、芸術文化の香り漂う上野の杜だけでなく、ビジネスやファッションのトレンドを発信する地域においても「感動」を体感できる社会を構築していきたい。

展覧会 「ハイカラ～目でさわる浮世絵～」
(イベント「GEIDAI ARTS LUMINE 0」)開催概要

会期:2016年7月28日(木)～ 8月9日(火)
会場:NEWoMan内文化交流施設 LUMINE 0
時間:11:00 ～ 20:00(入場19:30まで) 入場料:無料
主催:東京藝術大学社会連携センター、株式会社ルミネ
協力:東京藝術大学COI拠点

牧野氏のレクチャー「GEIDAI ARTS LUMINE 0」

浮世絵の香りを嗅ぐ来場者

— 表紙写真より —

8月24日開催 発達障がい支援ワークショップ 「音と光の動物園」

障がいと表現

「音と光の動物園」(Arts & Science LAB.)

「障がいと表現研究」「共感覚メディア研究」グループ、ベネッセこども基金、特定非営利活動法人ADDS(発達障がい児療育支援団体)の共同主催により、発達障がいのある子供たちのためのワークショップをArts & Science LAB.球形ドームにて開催。21組47名の親子が参加した。

最初に、9人の合奏団による音楽で子供達を迎え入れ、楽器の紹介や音色による動物の鳴き声当てクイズで、子供達を会場の空気に馴染ませた。続いて、動物のペーパークラフト作りでは、紙の動物を胴体のパーツごとに分けて色を塗り、iPadで撮影する「デジタル塗り絵」を用意(同時に療育士が子供一人一人のアセスメント)。その後、子供達がプロジェクションマッピングの砂場や楽器体験に夢中になっている間に、保護者は別室に移動し、茶話会スタイルで療育に関する情報を交換した。

最後に、サン＝サーンス作曲「動物の謝肉祭」の演奏にあわせて子供達が制作したペーパークラフトがスクリーンの中で動き出すと「僕の魚だ!」と大喜び。思いがけず子供達からアンコールの拍手が沸き起こった。

自閉症、アスペルガー、多動性など様々な症状に分けられる発達障がい。塗り絵には拒否反応を示した子供も、砂場では大いに遊ぶなど、自分にフィットする居場所さえ見つければ、未知の世界に入って行くことも困難ではないことがわかった。発達障がいは「場の空気を読まない」「臨機応変ではない」のが特徴という説明を受けたが、むしろそれは子供らしい反応であり、「楽しいふり」「わかったふり」のできる現代の大人びた子供たちには欠けている無垢さでもある。それぞれの子供たちに合う居場所を作ることこそが、芸術の役割であると感じた。

アンドロイド演劇 『さようなら』上演

ロボット・パフォーミングアーツ

9月30日(金)、愛知教育大学附属岡崎中学校において、アンドロイド演劇『さようなら』を上演し、その後中学生たちとディスカッションを行った。

岡崎中学校は全校アクティブラーニング化を行い、教科書を一切使わない学校として知られている。今回の授業も、9月から11月まで三ヶ月にわたって、大阪大学の石黒浩教授と平田オリザ特任教授が書いたロボット演劇に関する多数の著作を読み込み、人間とは何か、心とは何かについて考える最先端の国語の授業である。生徒たちは、すでにロボットやアンドロイド演劇に対する基礎知識を持っているので、上演後のディスカッションは非常に活発であり、多くの本質的な質問が出された。

私たちロボットグループでは今後も、このような授業を全国的に展開すると共に、初等教育向けのプログラム開発、大学でのロボットを使ったアート作品の可能性を探る授業など、多角的、多面的な展開を目指している。

愛知教育大学附属岡崎中学校でのディスカッション

JSTフェア2016出展

文化共有

馳浩・前文部科学大臣(JSTフェア2016)

JSTフェア2016(東京ビックサイト)

8月25日、26日東京ビッグサイトにて開催された「JSTフェア2016－科学技術による未来の産業創造展—」において、クローン文化財に焦点を当てた成果発表を行った。

会場には2016年春に開催した「素心　バーミヤン大仏天井壁画」展で公開した巨大天井壁画や、5月に開催された伊勢志摩サミットのサイドイベント「テロと文化財」にて使用された法隆寺金堂6号壁画とバーミヤン大仏天井壁画「天翔る太陽神(60％寸法)」をはじめとして、文化共有グループの制作した16点を展示した。巨大天井壁画は垂直に立ち上げた状態で展示し、高さ約7mの迫力ある姿で注目を集めた。その他、現在COIラボで復元プロジェクトの仕上げに取り組んでいる法隆寺釈迦三尊像の樹脂製3Dプリント、額縁までを再現したオルセー美術館所蔵作品のクローン文化財、小川香料株式会社との共同研究により制作した「香る浮世絵」を供覧した。「香る浮世絵」は浮世絵の鑑賞体験に嗅覚を結びつける斬新さで企業や大学関係者からの注目を集め、文化共有研究グループが推進する視覚・触覚・嗅覚などの五感を刺戟する共感覚イノベーションの今後の展開の可能性を垣間見せた。

26日には宮廻正明研究リーダーが講演会を行い、貴重な文化財の保存と公開を同時に可能にし、世界に「感動」を伝えるクローン文化財の意義をアピールした。

会期中は馳浩前文部科学大臣をはじめ、国会議員、JST関係者、大学、民間企業関係者など多くの方々が訪れた。宮廻RLをはじめ当グループの研究員や制作担当者と来場された方々との、活発な意見交換の場となった。

COLUMN

クローン文化財にまつわる話

東京藝術大学 彫刻科教授
深井 隆　文化共有GL

今年度、文化共有研究グループが制作したクローン文化財はいくつかのイベントに出品し、強いインパクトを与える事ができました。まず4月から6月に、タリバンにより破壊されたバーミヤン大仏天井壁画再現の展示を大学美術館陳列館で行い6万人近い人を迎えることが出来ました。ほぼ実物大の壁画を間近に見る事で、改めてその美しさと、亡失してしまった事の無念さを感じられたのではと思います。またこの展覧会期間中には、G7伊勢志摩サミットがあり、バーミヤン天井壁画と法隆寺金堂壁画を各国首脳にお見せする事ができました。文化財を巻きこみ破壊するテロ、その醜さ、むなしさを、クローン文化財を媒体にしてアピールができたと思います。

藝大COIの組織はいくつかのグループで成り立っていますが、文化共有研究グループはその中でも一番多くのスタッフで構成されています。そのほとんどの研究員、助手は、油画、日本画、彫刻、工芸、デザイン、文化財保存学を学んだ人たちです。彼等が創るクローン文化財は、最高の技術と感覚で仕上げられています。クローン文化財は、特許技術と文化共有研究グループのスタッフがいて初めて完成されるモノだと思います。

さて、あらためてクローン文化財に出来ることといったらなんでしょう。一つは、失ってしまった文化財の復元があげられるでしょう。上に挙げたバーミヤンや法隆寺の壁画は、残っていた画像データから復元したモノです。また部分しか残っていない文化財の当初の復元も同様です。一方、現在進めている法隆寺金堂の釈迦三尊像の復元は、3Dデータを計測し、3Dプリンターで出力し、鋳物にしたモノです。完成した像は、日本に限らず海外で展示する計画があります。より多くの人たちに身近で素晴らしさを体験していただけるとともに、何かあった時のためのバックアップになります(あっては困りますが)。現在進行中の、ブリューゲルの「バベルの塔」やゴッホの自画像、今後計画されている幾つかの文化財のクローン化も同様です。

これからも多くの役割を持つクローン文化財の可能性を広げていくことで、社会に貢献できればと思っています。企業、組織の皆様のアイディアをお待ちしたいと思います。

INTERVIEW

株式会社 竹尾

寺本敬一 氏、三瀬俊樹 氏、柿崎弘平 氏

2016年9月より、東京藝術大学COI拠点に株式会社竹尾が新たに参画しました。1899年の創業以来、紙の専門商社として培ってきたノウハウや知見を活かし、本拠点において、クローン文化財用紙の開発をはじめとする新たな紙の可能性を追求していきます。今回は、株式会社竹尾本社にて、寺本敬一氏、三瀬俊樹氏、柿崎弘平氏に今後の本拠点での活動についてお話を伺いました。

見本帖本店にて　左より柿崎弘平氏、寺本敬一氏、三瀬俊樹氏

－株式会社竹尾はどのような組織でしょうか。

今年で創業117年目を迎える紙の専門商社です。長い歴史を歩んできておりますが、竹尾はこれまで時代に合った紙素材を提供していくためのノウハウを積み上げてきました。その結果、メーカーとタイアップして商品作りを行う中で、竹尾は「機械を持たないメーカー」として、時代に即し、市場に求められる紙をつくっていきます。そこには、「ないものはつくる」という理念があります。

－本拠点に参画して取り組む研究内容とは。

クローン文化財制作のための新たな和紙の開発に取り組んでいきます。人の手による手漉きに比べ、抄紙機を用いる機械抄きは安定した品質の紙を量産し提供することができます。手漉き和紙を使用しているクローン文化財制作においては、これが作業時間短縮やコストダウンにもつながります。

ただ、手漉和紙には職人の手作りならではの温もりといった良さがあり、クローン文化財用紙の紙質については安定した方がいいのか、逆にしなくてもいいのか悩むところではありますが、手漉和紙の作り手が少しずつ減少していく中では、和紙の継承はもちろん、文化財の複製を通して思想や背景を後世に伝えていくという意味でも、取り組みがいのあるテーマです。

－産学連携で東京藝術大学やCOI参画企業に期待することがあればお聞かせください。

現在、いくつかの企業とともに「文化共有研究」というテーマのもとで共同研究に取り組んでおります。我々は紙という切り口からお手伝いさせていただくことになりますが、それぞれに切り口は違いながらも同じテーマに取り組む企業同士で協働し、例えばひとつの催し物や展示をつくりあげる機会を持つことができれば素晴らしいと考えております。

－2020にむけて取り組みたいことはありますか。

これまでの大きな世界大会と竹尾が扱っている特殊紙について振り返れば、前回の東京五輪（1964）では竹尾の特殊紙がポスターに採用され、2002 年の日韓共催ワールドカップの閉会式では、全国の小学生に折ってもらった折り鶴をスタジアムで降らせましたが、これも非常に薄い特殊紙が使われました。

来る 2020 年の東京オリンピックでも、竹尾は「紙」でオリンピックを盛り上げてきたいと考えます。紙は色々なところで使われる可能性があり、特に和紙はユネスコ無形文化遺産にも登録され世界から注目が集まっている素材です。和紙も含め、紙の良さを活かし、2020 年がより豊かになるよう貢献していきます。

株式会社竹尾90周年の記念誌「東西の職人図絵」より「紙すき」。竹尾のロゴマークとして採用されている図案。

70周年から10年ごとに編纂し発行している記念誌など。
（70周年：手漉和紙、80周年：世界の手漉紙、90周年：東西の職人図絵）
もう流通していないものを含め、紙の歴史を残す貴重な資料であり、「紙を通じて文化に貢献する」という竹尾の企業理念の一つを象徴するものである。